

平成30年7月豪雨による災害対応

■ 峰 達 郎* ■

○本市の概要

(1) 概要

佐賀県北部に位置する本市の市域は東西約36km、南北約30kmに及び、総面積は約487.60km²で、佐賀県全体の約20%を占めている。

市域の東部は福岡県糸島市及び佐賀市、南部は多久市、武雄市及び伊万里市、西部は玄海町及び伊万里湾を隔てて長崎県松浦市に境界を接し、北部は玄界灘に面している。また、東部は脊振山系が唐津湾に向かってなだらかに傾斜し、中部は松浦川の流域に沿って平野部が広がり、西部には丘陵地帯の上場台地がある。

その地先をなす唐津湾は、帯状の松原と砂浜が両翼に広がり、湾のほぼ中央に高島がある。近郊の海には、神集島、小川島、加唐島、松島、馬渡島、及び向島の離島群が東松浦半島を取り囲むように位置している。



写真-1 虹の松原



(2) 自然

本市の中部は緑豊かな田園地帯となっており、標高284mの鏡山の眼下には松浦川が流れ、穏やかな唐津湾とそれに続く玄界灘が広がっている。また、玄界灘の荒波によって作り出された七ツ釜は国の天然記念物に、海岸線に弓状に広がる虹の松原は国の特別名勝に指定されている（写真-1）。

東部にはシロウオで有名な玉島川が流れ、その上流は脊振、天山山系の森林地帯となっており、檜原湿原や観音の滝など山村特有の自然景観を形成している。南部には、県立自然公園に指定された脊振、天山山系の森林地帯が広がっており、アユの住む清流の巖木川や見帰りの滝などの自然が存在している。

北西部は上場台地という丘陵地帯を形成しており、稲作や畑作、畜産が盛んである。玄界灘に面する変化にとんだリアス式海岸線一帯は、風光明媚ないろは島や、波戸岬などがあり、玄海国定公園に指定されている。

(3) 歴史と文化

本市は、古来大陸との交流が盛んにおこなわれ「魏志倭人伝」には「末盧国」として記述された地域であり、朝鮮半島や中国大陸からの様々な文化が取り入れられ、全国へと伝わったと考えられる。それを示すかのように、数多くの遺跡があり、歴史を知る上での重要な文化財が多く出土してお

* Tatsuro Mine 佐賀県唐津市長



写真-2 唐津城



写真-3 旧唐津銀行



写真-4 唐津焼

り、考古学的に重要な地域となっている。

近年では、唐津出身の建築家、辰野金吾監修の旧唐津銀行本店、石炭産業の発展に尽力した高取伊好による旧高取家住宅、捕鯨の歴史を物語る鯨組主田中尾家住宅などの建造物が現存している(写真-2, 3)。

伝統的工芸品「唐津焼」は、肥前陶磁器を代表とする伝統工芸として、全国に多くの愛好家を持っている。現在唐津には多くの窯元があり、その伝統を守り受け継ぐとともに、新しい感覚を取り入れた魅力ある作品を作り続けている(写真-4)。

また、ユネスコ無形文化遺産に登録の「唐津くんちの曳山行事」や重要無形民俗文化財として国指定の「呼子大綱引き」をはじめ、県指定の「広瀬浮立」など各地域に伝統的な祭りが守り引き継がれており、地域の連帯感を醸成するとともに、世代間の交流を深める上での重要な役割を担っている。

○平成30年7月豪雨災害被害状況

平成30年7月5日から、西日本を中心に記録的な大雨となり、特に7月6日から8日にかけては、

「大雨特別警報」が発表され、これは平成25年の運用開始から1つの災害で4都道府県以上に出されたのは初めてという状況であった。

佐賀県においても、7月5日からの24時間雨量

が、北山観測点で581.5mm、伊万里観測点で441.5mmなどとなり、特徴としては短時間に一気に降ったわけではなく、北山観測点において1時間雨量が59.0mmに対して、48時間雨量が581.5mmであることから、長時間降り続いたという特徴がある。

7月6日には道の駅「巖木」の駐車場で土砂崩れが発生し、2名が救急搬送された。また、幸い人的被害は出なかったものの、JR筑肥線が土砂崩れにより脱線する事故が発生した。

唐津市においては、以下の写真のとおり、7月7日に市道佐志平木場線の路肩部が延長30m、高さ7mにわたって崩壊した(写真-5, 6)。また、市道古瀬線では延長52.5m(1工区23.0m・2工区29.5m)にわたって道路のり面及び路肩部が崩壊し、そのほか市道224か所、河川15か所が被害を受けた。このように、市民生活に重要なインフラである道路等が甚大な被害を受けた。

また、相知町伊岐佐、浜玉町平原の2か所で土石流が発生し、大量の土砂が流出した。幸いにして人家等への直接的な被害はなかったものの、集落のすぐ上流に大量の土砂が堆積したことから、



写真-5 被災した佐志平木場線①



写真-6 被災した佐志平木場線②

次の大雨による被害の発生が懸念される状況となった。

○災害復旧の概要

前述の市道佐志平木場線については、道路の路肩が崩壊したため主に大型ブロック工（面積A = 226㎡）での復旧を行った。



写真-7 復旧工事後の佐志平木場線①

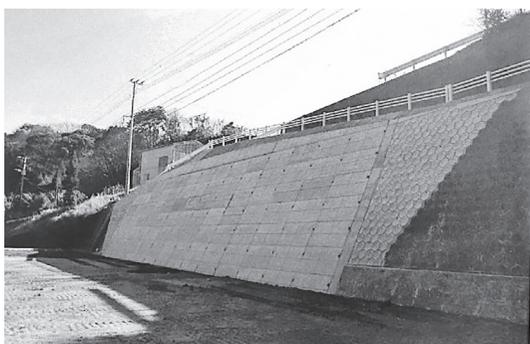


写真-8 復旧工事後の佐志平木場線②

施行区間において掘削面が崩壊したことで、仮設工の工法検討などに時間を要するなどの問題も発生したが、写真-7～9のように、令和2年3月に復旧工事が完了した。

また、土砂災害に関しては前述の2か所において、県が実施する災害関連緊急砂防事業が採択され、砂防堰堤の建設により地域の安全が確保された。

○防災・減災

～平成30年7月豪雨を経験して～

(1) 市職員の防災体制の強化

平成30年の豪雨の際、事態の推移や災害の状況に応じた災害対応ができず、特に、初動において実施すべき災害対応業務に関し混乱が見受けられた。この経験から、本市では、防災対策監（自衛隊OB）を中心に防災体制の見直しを図り、事態の推移に応じてシームレスかつ適切に対処できる体制を構築した。

(2) 防災情報伝達手段の強化

本市では、これまで防災行政無線、登録制情報メール、市ホームページなど多くの情報伝達手段を活用して、防災情報を伝達していた。

平成30年豪雨の際、屋外の防災行政無線放送が聞き取りにくかったとの



写真-9 復旧工事後の佐志平木場線③

意見から、更に確実に防災情報を伝達するため、令和2年度から280MHz デジタル同報系無線システム「唐津市防災ラジオ」を対象となる世帯に無償貸与している（写真-10）。

また、「唐津市防災ラジオ」は、市からの防災行政放送、消防本部からの火災発生情報だけでなく、自治会単位での地域放送が可能で、日頃から利活用していただけるようにした。



写真-10 防災ラジオ

《唐津市の情報伝達手段》

- ①防災行政無線（60MHZ）
- ②市ホームページ
- ③行政放送（チャンネルからつ）
- ④Lアラート（テレビL字テロップ）
- ⑤市登録制情報メール
- ⑥緊急速報メール
- ⑦ Facebook
- ⑧ LINE
- ⑨防災ラジオ

～将来の大規模災害に備えて～

(1) 地域防災リーダーフォローアップ講座

令和4年度、市内在住の地域防災リーダーの方などを対象に、防災の知識や技術力を向上させ、より地域に密着した地域防災活動を行っていただくことで、防災力向上を図ることを目的として、地域防災リーダーフォローアップ講座を開催する。講座の内容は、自然災害対応並びに原子力防災対応の防災体制を理解していただくための講話や、佐賀県総合防災アドバイザーの講演会及びワークショップの実施など、年間4回程度開催する計画で、地域防災リーダーを中心とした、自主防災活動を目指している。

(2) 男女共同参画の視点を踏まえた避難所運営マニュアル整備

本市では、幸いにして、長期の避難生活を強いられるような大規模災害に遭っていない。しかし、平成30年7月豪雨以降、佐賀県の近隣自治体では、避難所を開設している状況である。本市では、今後、大規模災害発生時における避難所の運営に「男女共同参画の視点」を取り入れることにより、安心・安全な避難所の運営を行い、「市民みんな」の命を災害から保護することを目指し、避難所運営マニュアルを整備することにした。

避難所においては、性別によるニーズの違いや子育て・介護の必要な家庭の方、外国人、高齢者の方、障がいのある方など、様々な配慮が必要であることから、マニュアルの整備にあたっては、市民等の意見を反映する「マニュアル作成検討委員会」を発足し、誰もが安心して避難できるよう多様性に対応したマニュアルを作成したい。

〇おわりに

気候変動による自然災害の激甚化により、九州でも「令和3年8月の大雨」をはじめ、記録的な豪雨に見舞われ、尊い命や貴重な財産が失われた。

九州では、近年の激甚な豪雨災害に加えて、活発な火山活動、南海トラフ巨大地震などによる甚大な災害が想定されるなど、まさに災害の最前線に位置している。

これらの災害に対し、被害を最小限に抑えるためには、更なる防災・減災、国土強靱化の取り組みが不可欠である。また、今後温暖化による気候変動の影響により更に頻発化する豪雨災害に対して、国・県・市町村等のあらゆる機関が協力し、流域全体でおこなう「流域治水」への転換を図り、「流域治水プロジェクト」を強力に推進する必要がある。

このように激甚化する災害に備えるためには、行政だけでなく、地域防災リーダーを中心とした、自主防災活動などをおこなっていただくため、市民の防災意識の向上のための啓発活動への取り組みを、今後も継続的に行っていきたい。